

交流・文化施設等整備検討委員会 専門委員会（美術館部会）

会 議 次 第

日時：平成20年11月13日（木）午後3時～

場所：上田駅前ビルパレオ 2階会議室

1. 開 会

2. 議 事

（1）郷土の作家による常設展示について

（2）その他

3. 閉 会

創造と自由を追求した大正時代の芸術家

山本 鼎

明治十五年（昭和二十一年）
（一八八二—一九四六）



山本鼎は明治

木版工房へ 十五年、愛知県
弟子入り 岡崎市に生まれ

ました。父一郎は漢方医の家を
継ぐべき人でしたが、医師免許
の制度改正で西洋医学が必要と
なり上京し、森静男（鷗外の父）

の医院に書生として住み込みました。鼎も母たけとともに五歳
で上京し浅草山谷町に住みました。

鼎は尋常小学校四年を卒業すると、芝区浜松町にあった桜井
虎吉（唯雲）の木版工房へ弟子入りし、当時の印刷技術であつ
た木口木版の技法を習得しました。明治三十一年（二八九八）、
一郎は小泉郡神川村大屋に大屋医院を開業しました。岡崎出身
の鼎と上田との由縁がこうして生まれたのです。

「漁夫」誕生
と創作版画

明治三十七年（一九〇四）、鼎は雑誌『明星』
に木版画「漁夫」を発表しました。生活感あふ
れる海の男のたくましさ表現した鼎の代表作
品です。友人の石井柏亭は、これを「刀画」と称し絶賛しまし
た。また、鼎は明治四十年に石井柏亭、森田恒友と版画同人誌
『方寸』を創刊しました。鼎らはこの雑誌の中で、当時印刷技

術として扱われていた版画の美術的要素と価値を主張し、絵画
と同じ芸術表現の一つとして版画を制作しました。こうした鼎
たちの創作的版画活動は、近代日本の版画芸術の革命となりま
した。大正八年（一九一九）には、版画をより一般的な芸術活
動として普及するために、織田一磨、戸張弧庵らと日本創作版
画協会を設立し会長に就任しました。

ヨーロッパ留学
と 画 業

鼎は版画家として活躍しただけでなく、
画家としても近代日本美術にその名を残し
ています。明治三十五年、二〇歳で東京美
術学校西洋科選科へ入学。ヨーロッパの印象派の影響を強く受
け帰国した外光派の黒田清輝に油絵を学びました。大正元年
（一九一三）、自らもフランスへ渡りました。生活は厳しかった
ものの、パリの木版工房でアルバイトなどをしながら、一時は
エコール・ド・ボザール（フランス国立美術学校）のエッチング
科に籍を置きました。多くの美術館・画廊を廻り、写生旅行に
出かけ、五年間の滞欧生活を経て大正五年に帰国しました。



「漁夫」

翌年、日本美術院
洋画部の同人に推挙
され、その年の展覧
会に滞欧中に描いた
作品「サーニャ」
（大原美術館蔵）など
一七点を出品し好評

を博しました。大正九年（一九二〇）に同洋画部を脱退。二年
後に、足立源一郎、梅原龍三郎ら六名とともに洋画団体「春陽
会」を設立しました。しかし、昭和十年（一九三五）、帝展改組
問題が起こり、鼎は美術界の統合に賛成して一時春陽会を離れ
たりもしました。また、自らの制作活動だけでなく、一般大衆
向けに『油絵ノ描キカタ』（一九二七年アルスより発行）『油絵の
スケッチ』（一九二〇年アルスより発行）など油絵技法書を執筆
し、美術の振興と普及に貢献しました。

自由画
教育運動

鼎はヨーロッパから帰国後、児童の絵とその
教育について一つの運動を起こします。当時、
日本の図画教育では『新訂画帖』という教科書
が使用されてきました。これは芸術的な専門性をなくし、臨画
（お手本の模写）、図案、色彩、構図法、記憶画、写生、考案図と
いう様々な要素が盛り込まれた教育的な図画教科書でした。鼎
はこの教育方針に異議を唱えました。絵を描く技術、方法が重
要なのではなく、芸術自体の意義や行為そのものが児童の発育
にとって、どれほど大切かを説いたのです。その思想のもと大
正八年（一九一九）四月神川小学校で第一回児童自由画展覧会
を開催し好評を博し、第二回を下伊那郡竜丘小学校（飯田市）
で開催しました。鼎は全国各地へ講演会に出かけました。ま
た、児童雑誌『赤い鳥』『金の船』の自由画選評を行い、自ら、
義兄の北原白秋などと協力して『芸術自由教育』という雑誌を
発行しました。こうして自由画教育は全国に広がりました。

農民美術運動

自由画教育運動に着手した同年十二月、鼎
は同村で農民美術運動を起こします。これは
厳冬期が長い農村の副業として、農民が芸術的美しさを備えた
生活雑貨（木製品や織物・染物など）や木彫人形を作り、都市へ
向けて販売しようという運動です。村の青年実業家で自由画教
育運動にも賛同した金井正、山越脩蔵の協力のもと、第一回
農民美術講習会を開講しました。青年たちにデザインや木彫な
どを教える講師には、芸術家仲間である倉田白羊、小杉放菴、
山崎省三、吉田白嶺、永瀬義郎などが招かれました。翌年五
月、東京日本橋の三越デパートで頒布会が開催され農民美術は
人気商品となりました。大正十二年、大屋の高台に日本農民美
術研究所が建設され、運動の拠点となりました。また農民美術
は県や農商務省から補助金を得るなど、新しい副業として全国
の農村で実践されていきました。

鼎の生涯を
振り返って

山本鼎は芸術家である一方、児童自由画、農
民美術など美術教育運動を手がけた事業家とし
て昭和二十一年、疎開先の上田市馬場町で六四歳の生涯を閉じ
ました。鼎は創造的で自由を尊ぶ大正時代を象徴する生き方を
貫いた芸術家です。

館内案内

本館の資料 約1,800点

1階
講習室兼第2展示室
入口
事務室
第1展示室
非常口
倉庫
(第1展示室)
○現代農民美術作家の作品展示

2階
山本鼎作品展示室
第3展示室
倉庫
(第3展示室)
○山本鼎の油彩をはじめ版画作品、農民美術、児童自由画等、関係資料の展示をしています。

○竣工 昭和37年10月8日
○建物面積 1階 221.48㎡
2階 307.43㎡
合計 528.91㎡

館内展示室

農民美術(木片人形)

油彩 水彩 創作版画 自由画教育 農民美術

上田市山本鼎記念館

開館時間 午前8時30分から午後5時(入場4時30分まで)
休館日 毎週水曜日/祝日の翌日/年末年始(12月29日～翌年1月3日)
8月から10月までは無休開館
長野県上田市上田公園内
TEL・FAX 0268-22-2693
URL <http://museum.umic.ueda.nagano.jp/kanaa/>

記念館案内

山本鼎記念館のご案内

第1展示室
現代農民美術作家の作品展示をしています。

第2展示室
講習会および期間特別展示を行います。

第3展示室
山本鼎の油彩40点をはじめ版画作品、農民美術、自由画ほか、鼎の関係資料の展示をしています。

開館時間 午前8時30分から午後5時(入場4時30分まで)
休館日 毎週水曜日
祝日の翌日
年末年始(12月29日～翌年1月3日)
※8月から10月までは無休開館です。
[平成19年度のカレンダー](#)
[平成20年度のカレンダー](#)

入館料(博物館・上田城櫓・山本鼎記念館共通観覧料金)

一般	高校生以上の学生		小中学生の児童・生徒	
	個人	団体(20人以上)	個人	団体(20人以上)
250円	一人につき200円	180円	一人につき100円	一人につき40円

・未就学者は、無料です。
・上田市に在住の小中学生・高校生は、無料です。
・土曜日に、上田市内の小中学生と共にその保護者が観覧する場合、子ども的人数を上限として、保護者も無料となります。
・障害のある方及び介助者は、一般60円、大学生以下無料となります。
・八十二文化財団友の会会員の方は、団体料金となります。
・池波正太郎・真田太平記念館、信濃国分寺資料館にも入館できる共通観覧券(500円、団体適用者は300円)もあります。

お問い合わせ先
〒386-0026
長野県上田市二の丸3番4号
上田市山本鼎記念館
TEL&FAX:0268-22-2693
メールアドレス:
kanas.v@city.ueda.nagano.jp

- ### 山本鼎の略歴
- 1882(明15) 愛知県岡崎市に生まれる。
 - 1887(20) 一家東京に転居
 - 1892(25) 木版工房櫻井虎吉の内弟子となる。
 - 1898(31) 一家上田市大屋に転居、父一郎匠師開業
 - 1902(35) 東京美術学校(現・東京大)西洋画科選科に入学
 - 1904(37) 木版画の代表作「漁夫」を発表、日本近代版畫の夜明けを告げる。
 - 1906(39) 同校を卒業、「東京パック」の仕事をする。この頃から、諷刺画を描く。
 - 1907(40) 石井柏亭、森田恒友らと「方寸」誌創刊
 - 1909(42) 北原白秋詩集「邪宗門」挿絵
 - 1912(大1) フランスに留学、木版画を制作
 - 1914(3) 島崎藤村と親交、欧州大戦でイギリスに避難
 - 1916(5) スエーデン、ロシアを経て帰国、ロシアにてトルストイに感銘
児童画、農民美術に関心をいだく。
 - 1917(6) 日本美術院洋画部同人。北原白秋の妹いまと結婚。著書「油画の描き方」刊
 - 1918(7) 日本創作版画協会設立、会長となる。
 - 1919(8) 上田市神川小学校で児童自由画教育、農民美術運動を始める。
 - 1920(9) 「赤い鳥」誌で自由画の普及につとめる。各地で講演
 - 1922(11) 小杉放庵、梅原龍三郎、岸田彌生、倉田白羊らと春陽会設立
 - 1923(12) 上田市大屋に日本農民美術研究所設立
 - 1924(13) 「アトリエ」誌創刊。台湾視察
 - 1926(昭1) 岡田三郎助、藤島武二らの素業会展に出品
 - 1931(6) 日本版画協会設立、副会長となる。
 - 1934(9) 朝鮮半島に旅行
 - 1935(10) 帝展参加。日本農民美術研究所閉鎖状態となる。春陽会脱退
 - 1936(11) 新文展洋画部審査委員
 - 1940(15) 日本橋三越で大個展
 - 1942(17) 11月群馬県黒根湖ふじや旅館で脳梗塞でたおれる。
 - 1944(19) 病氣療養のため上田市に転居
 - 1946(21) 10月8日永眠
-
- 山本鼎 (35才頃)
-
- 漁夫(版画)

山本鼎の業績

1 自由画教育運動

山本鼎がフランスから帰国したこの高貴教育は、すべて画一的形式的なもので、児童の発達段階に応じた個性を尊重したものでなかった。特に「教育」においては、江戸時代末期の御用絵かきの書いた模範絵を、従来の口伝技術によって手本を写して模写させるという極めて封建的強固な教育方法がとられていた。後の教育においても大抵これと大別小異のもので、大部分の教育者も不思議にも思わず全国で行われていた。これにはほげほげと感銘を受けた山本鼎は、この模範教育を痛感し、児童の個性を尊重した教育にしなければならぬことを強く主張した。これが、当時のある教育者に非常な感銘を与えたばかりでなく、新しい考えをもった教育者もあちこち、世の本陣をもって任ずる人々に波及され、庶民の火の如く蔓延して今日の国工教育の発展をきたしたものである。

2 農民美術教育運動

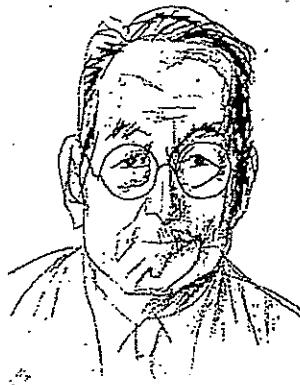
山本鼎が帰国した当時の農民は、第一次大戦と資本主義経済のありをくって、将来に希望を失い、虚へいのどん底におち入りうとしていた。日本国民の大多数を占める農民の生活が安定しない限り、国をよくすることができないと考えた山本鼎は、農民層を有効に生かすこと、農民芸術を経済生活に結びつけ、農民生活に向上とらさがいと誇りをもちたせるために計画されたものでこれが農村復興をいかにしたらよいかと通っていた農商省の全面的支持と、各県の農村指導者から多額の助成をもって選えられたものである。神川村の一派に派々の声をあげたこの金で、日ならずして全四州を巡りにまで回されたのも、時局に遇していたからであった。現在全国各地に物産として優々の民芸品がつけられているが、これ等のほとんどが山本鼎のはじめた農民美術に影響を受けたものであることは、百もまたないことである。

3 創作版画協会の設立

版画という言葉は、山本鼎の創作だという(世界大百科事典)。日本古来の浮世絵式の版刷を改良し、これに木口紙の手法をとりこみ、日本の版刷界に新生命を吹きこんで今日の隆盛をきたしたのは、山本鼎の功績であった。世界的に日本の版刷の地位は高揚されているが、これに新生を新機軸を興ったことだけでも山本鼎の業績は不朽のものであるといえる。

施設名	山本鼎記念館	
設置者	上田市	
概要	開館年月	昭和37年10月
	経過年数	(46年経過)
	敷地面積	
	建築面積	307.43
	延床面積	526㎡
	収蔵数	620点
利用状況	説明	児童自由画・農民美術運動を指導した版画洋画家山本鼎の記念館。油彩や版画等の資料や木彫の農民美術作品を展示。
	19年度利用者 管理運営費	40,355人 4,635千円
展示室	利用内訳	常設展示、企画展示、講習会等
	展示内容	第一展示室 ・現代農民美術作家の作品展示 講習室兼第二展示室 ・講習用兼展示用 第三展示室 ・山本鼎の油彩、版画、農民美術作品、関係資料展示
収蔵庫	課題等	ショーケースが後付のため展示・閲覧に難あり。
	状況	倉庫を改修し利用している。
駐車場等	課題等	スペースが狭いため搬出入困難。温湿度管理にも難あり。
	状況	市民会館兼用普通車90台
備考	課題等	一般車、大型車とも駐車場難。敷地面積7,200㎡
	備考	史跡上田城整備基本計画(H3.3)で移転対象施設に該当

美術の広い分野で本格独自の造形性を高めた美術家
石井鶴三 明治二十年—昭和四十八年
(一八八七—一九七三)



石井鶴三自画像

美術の広い
分野で活躍
六年間、彫
塑講習の講

師を続けた石井鶴三は、東
京芸術大学教授、日本芸術
院会員、日本美術院同人、
春陽会会員、日本水彩画会

会員、日本版画協会会長などを歴任しました。鶴三は、名だたる相撲通で横綱審議委員会、相撲博物館長も務めました。塑像と木彫が専門の彫刻家、高名な挿絵画家であり、優れた版画家で、素描、水彩、油彩、水墨をよくする画家でもありました。その造形活動は、大変広い分野にわたりますが、立体感動を根幹とする卓抜な造形力が貫き、本格独自の鶴三世界の形成です。

美術一家に 生い立つ

鶴三は明治二十年、東京下谷に生まれました。父重賢(船湖)は印刷局に勤める画家、祖父鈴木我古も画家、養祖父三浦乾也は造船事業にまで従事した陶芸家、長兄柏亭も有名な洋画家です。鶴三はこの美術一家で育ちました。明治三十年父が肝臓がんで死去。一家は支柱を失い、満一歳の鶴三は千葉県船橋の矢橋家の養子に出されました。ばか正直で内気な鶴三は、薪炭を商う家の

仕事を苦勞もいとわずまじめに手伝いました。世話を任されていた飼馬が、鶴三少年を慰めた無二の友達だったので。馬と仲良しになった鶴三は、馬の体の不思議な感触に打たれ、粘土と漆喰を竹と木と針金で作った骨組みにつけて馬の形を造りました。彫刻の萌芽といふべき経験をしました。

求道修行 の第一期

結局、商家に向かなかった鶴三は明治三十六年実家へ戻りました。彫刻家になろうと考え、まず画塾不同社へ入りました。ここで小山正太郎から一つの教えを受けました。一つは論語の「君子は和して同せず、小人は同じて和せず」で、芸術を志す者は和して同ぜずの君子の心でなければならぬということ、もう一つは「絵はたんだ一本の線で描かなければいけない」ということでした。同じころ遠縁の加藤景雲から木彫の技法を学びました。

明治三十八年東京美術学校彫刻科へ入学、柏亭が眼病で働けなくなり家計を助けるために漫画記者を始めました。午前は学校、午後は遅くまで漫画社という生活が八年も続きました。車中街(中街)上(中街)でも素描に打ち込む鶴三がここで生まれました。二〇歳の時、山本鼎と浅間山に登り、西方に遠く連なる日本アルプスの神々しい姿に打たれ以後山岳は、鶴三の求める造形力を養う道場になり、山岳から受ける不思議な感動は「山の幻影」を呼び起こし生涯のテーマになりました。萩原礫山の「文覚」に感じ、美術学校の教育や一般彫刻界の作に不満の鶴三は、ロダンを説く高村光太郎を敬愛しました。明治四十四年

文展出品の「荒川岳」は褒状を受け注目されました。大正四年、佐藤朝山の招きで日本美術院研究所に入り本格的な研究に打ち込みました。奈良の旅に出て古美術研究に励み推古仏に傾倒しました。大正五年日本美術院同人に、同じ年、水彩画で二科賞、創作版画協会員は大正十一年からでした。同年創立の春陽会には、はじめ役員後会員になりました。始めた挿絵も上司小剣著の『東京』が評判でした。福田美佐と結婚。新居に土俵をつくり修行の場としました。

本格へ進む 第二期

震災前後を境に、鶴三の目指す造形の骨組み、道筋が生まれ活発な活動が始まりました。小泉上田教育会の招きで彫塑講習会の講師として、初めて上田へ来たのが大正十三年です。美術院研究所を上田へ移すという意気込みで「やる以上は専門家も素人もない。本格のみだ」といい「教えるのではなくみなさんと一緒に勉強する」鶴三でした。翌年から上田彫塑研究会の主催で昭和四十五年まで(昭和二十年休講)続けました。「婦人像」「信濃男坐像」「老婦袒胸」などの名作が上田で生まれました。長野、木曾、下伊那へ講師として訪れることも多くなり、信州教育会との深い縁が結ばれました。評判の「俊寛頭部試作」は昭和五年の院展入選です。中里介山著『大菩薩峠』の挿絵は大正十四年から昭和三年にかけて、東京日日新聞、大阪毎日新聞に載り、吉川英治著の『宮本武蔵』の挿絵は、昭和十二年から翌年にかけて朝日新聞に連載されました。自由学園の美術教師や老荘会の

公田蓮太郎の中国語の聴講も続けました。日本版画協会会長に推されたのは昭和十六年でした。翌十七年には、晩年の島崎藤村モデルの坐像をつくりました。昭和十九年には、横山大観の推薦で東京美術学校彫刻科教授に就任しました。

花開く鶴三 世界へ第三期

終戦の八月、美佐夫人を亡くしますが、これから我々の時代だと元気で「今わたしたは人生の春を迎えた心境だ」と書いています。昭和二十四年美術学校は東京芸術大学となり、教授に就任しました。二十五年には芸術院会員、新設の横綱審議委員会になりました。木曾教育会協力支援で木彫「藤村先生坐像」第一作、第二作が始まり、さらに「木曾馬」牡牝二頭をつくりました。「石黒忠篤翁寿像」や油彩「山口翁像」水彩「少女シユミーズ」など注目される作品が次々と生まれました。昭和二十七年から翌年にかけては、法隆寺金堂再建修理で雲斗、雲肘木の補作に従事しました。七〇歳を過ぎたころからでしょうか、鶴三は「風」に見るように多年の習作試作の土台の上に「石井鶴三」という独自の花の咲く制作の時を迎えました。時流を追わず流されず、あくまで自己に発して天意を聞き、根源に問い、源流に心を洗い、力を尽くして歩んできたそのすべてのものが、一体となって咲きでる世界でした。司馬遼太郎著『宮本武蔵』の挿絵、山の幻影の「森の男」「山精」の版画と彫刻、数々の能彫刻、「やくもたつ」「いへきかな」「地天泰」の版画が最晩年の純粋、無雑の作品になりました。

石井鶴三

TSURUZO ISHII MUSEUM OF ART
美術館
長野県上田市大手2-8-2 TEL:0268-24-8800



つるぞう
石井鶴三先生と上田
— 美術館開館の経緯 —

「私は長野県人ではないが、長野県人とまちがえられる。」と述べられた先生は、信州の山を愛し、人を愛し、その人格と芸術を通じて信州教育に極めて大きな影響を与えられた。
先生は、大正13年(1924, 38歳)、小県 上田教育会主催の彫型講習会に、倉田白羊産伯の推せんにより講師として上田に来られて以来、昭和45年(1970, 84歳)まで毎夏、実に半世紀にわたり生涯をかけて指導に当たられた。
「彫刻の勉強は、立体造形を追求することであり、人間性である。やる以上は本格でなければならぬ。」と始終一貫講習生とともに制作された偉大な芸術家であり、教育者である。
当教育会は、創立100周年の記念事業として300点にのぼる先生の彫刻や素描、水彩画、油彩画、挿絵、版画など貴重な作品や資料を保存し、公開するとともに先生が「立体的芸術を通して」芸術教育の伝承と創造の場として昭和60年7月に開館した。
鶴三芸術の幅の広さと奥の深さを一堂に集めてあるのが特徴である。

彫刻の鑑賞

- 彫刻の鑑賞は、立体の美を見ることが、それを味わい、感じることであり。
- 立体の美は、これを一つの塊りとして心に受け入れることが第一。そのためには、周囲を回ってみるのが大切である。
- 彫刻の美の要素は、面、線、量、動勢、光と陰等であるが、それらが立体的にどう構成されているかが彫刻のもつ特殊性である。



「老婦袒褌」
○昭和11年(1936)作
・50歳(上田での第13回展)
・高さ59.5cm
・第23回院展出品
記憶の写実をとおして、老女の心情を見事に表現している。肉の少ない人体像は、骨格を重視した鶴三の世界である。



「風」(試作)
○昭和11年(1936)作
・50歳
・全高79.0cm
前述の「老婦袒褌」に対して、象徴的な性格の強い作品である。雄大なロマンに満ち、限りなく大ささを感じさせる。



「相撲」(五)
○昭和15年(1940)作
・54歳
・高さ36.5cm
・紀元2600年奉祝展出品
「彫刻は、塊りの芸術である。彫刻的にみれば力士は一つの塊り、相撲は塊り塊りである。」といっているように鶴三は相撲を好み、相撲を題材にして多くの作品を残している。

絵画と彫刻

- 「デッサンとモデル(肉付)は、同じ親から出た兄弟のようなものである。」といっているように、鶴三は絵画と彫刻の両面から造型を追求した。

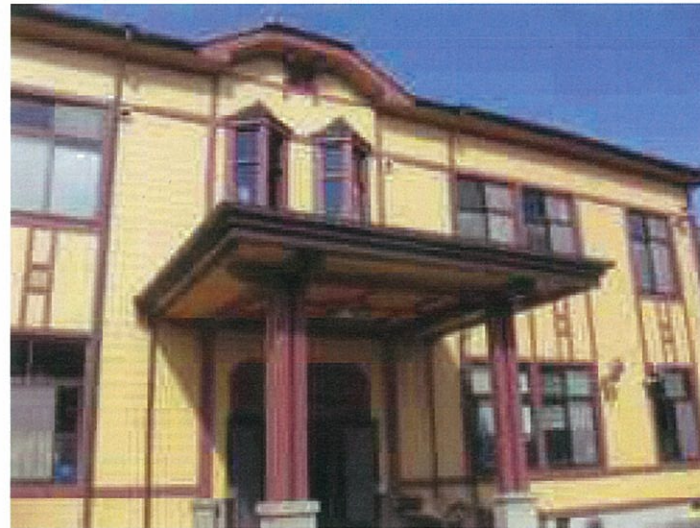


「浅間遠望」
○昭和32年(1957)作
・71歳
・油彩50.0×60.5cm
・第34回春陽会展出品
「信州の山岳の魅力に心をひかれたのは、はたちの時、浅間山に登り、はじめて山雲の洗礼を受けたのであるが……」以後信州の山は鶴三芸術の根柢となる。

「石井鶴三」略年譜

年	年齢	事
明治20年	1歳	6月5日、東京下谷に生まれる。父鶴三、兄伯亭は画家。三男、鶴三と命名される。
明治31年	12歳	前年、父が没し、船積の薪炭業を営む叔父の家の子になる。その時の創馬との出会いが、彫刻の世界へのきっかけとなる。
明治37年	18歳	実家へ戻る。小山正太郎の不同舎で絵を、加藤景雲に木彫の技法を学ぶ。
明治38年	19歳	東京美術学校(現 東京芸大)の彫刻科専科に入学。
明治39年	20歳	兄伯亭、眼病となり、学費だけでなく家計も助けるために「東京パック」の記者になり、漫遊を描く。(8年間)生涯で最も苦難の時代であったが、芸術修業の良き試練とした。
明治41年	22歳	文展出品の萩原守衛作「文覧」をみて、これこそ真の彫刻と感動する。
明治44年	25歳	南アルプスの赤石連峰を歩き、山から受けた感動を「龍川嶽」と題して石膏にし、第5回文展に出品、褒状を受け、新進作家として注目される。
大正 4年	29歳	佐藤朝山の招きで、日本美術院研究所に入り、絵画、彫刻両面より同志とともに造型についてしごきをける猛烈な勉強を続ける。
大正 5年	30歳	院展に「中原氏像」ほか出品、美術院同人となる。
大正10年	35歳	上小彫刻の代表的大作「東京」(朝日新聞)の挿絵をかく。以後、中野介山作「大菩薩峠」、吉木三十五作「南國太平洋」、吉川英治作「宮本武蔵」などの挿絵を執筆。
大正11年	36歳	山本鼎、小杉未醒らの春陽会創立に参加、後に会員。
大正13年	38歳	6月、倉田白羊の推薦で、小県上田教育会の彫型講習会の講師となる。昭和45年まで47年間、毎夏上田に来て講習生とともに研究に励む。
昭和2年	51歳	長野県美術研究会の絵画講習会の講師となる。(昭和33年まで)
昭和9年	58歳	横山大観の推薦で、東京美術学校の彫刻科教授に就任。
昭和25年	64歳	機関審議委員、日本芸術院会員に任命される。小県教育会館で「石井鶴三作品総合展」を開催。
昭和34年	73歳	上田彫型研究会35周年記念「石井鶴三作品展」を開催。「彫刻について」の講演をする。
昭和44年	83歳	相模博物館館長となる。
昭和48年	87歳	3月17日、心臓衰弱により坂本の自宅にて没す。

■移転先：上小教育会館 2階



- 【開館時間】 10:00～15:00
- 【休館日】 土曜日、日曜日、祝日、年末年始
- 【料 金】 無料
- 【所在地】 上田市大手2丁目7番地13号 上小教育会館2階
- 【問合せ先】 TEL:0268-23-1151 小県上田教育会

施設名		石井鶴三美術資料室
設置者		小県上田教育会
概要	開館年月 経過年数	平成20年4月移設 —
	延床面積	69.4㎡
	収蔵数	667点
	説明	上田での彫刻講習会で半世紀に亘り講師を務めた日本近代彫刻界を代表する彫刻家石井鶴三の作品を展示。
	19年度利用者 管理運営費	約2,000人 約2,400千円
利用状況	利用内訳	常設展示、企画展示、講習会等
	展示内容	石井鶴三の彫刻、絵画、版画、挿絵、その他関連資料の展示
展示室	課題等	もともと上小教育会館の講堂であるため、照明、展示、温湿度管理に難あり。
	状況	物置を利用。
収蔵庫	課題等	スペースが狭く温度湿度管理も困難。
	状況	上小教育会館兼用普通車23台
駐車場等	課題等	教育会館との兼用駐車場であること。
	備考	

上田が生んだ国際商業写真家

ハリリー・K・シゲタ

明治二十年—昭和三十八年
(一八八七—一九六三)



一五歳の欣二少
年決意の渡米 (ハリリー・
重田欣二)

は、明治二十年七月五日、原町に父重田助太郎の次男として生まれ、重田家は熱心なキリスト教信者で、父は銀行員、

母は書店を営んでいました。温厚で賢かった欣二少年は、だれからも欣ちゃんと呼ばれ親しまれました。上田中学校のころ、太平洋のかなたに、新しい文明を追求する国アメリカがあると聞き、渡米の決意を固め中学校を二年で中退して海を渡りました。

シアトルの親戚を頼って行ったのですが、長期不在で面会できず困惑しました。教会の一室を借り、厳しい生活が始まりました。憧れてきたアメリカの文化を早く身につけるため、語学に力を入れます。口に出せないほどの生活苦が続きますが、名前の欣二をハリリーに替えたのも、彼の決意の表れでしょう。

芸は身を助けると言われていますが、彼の手先の器用さは抜群で、その奇術は超一流劇場で、「シゲタのマジック」といわれ、大事な資金になったようです。

渡米した翌年、ミネソタのセントポール美術学校に入り、肖

像画、デザインを勉強中にスナップ写真に興味を持ち、やがて写真スタジオに勤めながらプロ写真家への道を進みました。

芸術写真と
商業写真
一九一〇年代のアメリカの写真界での対立

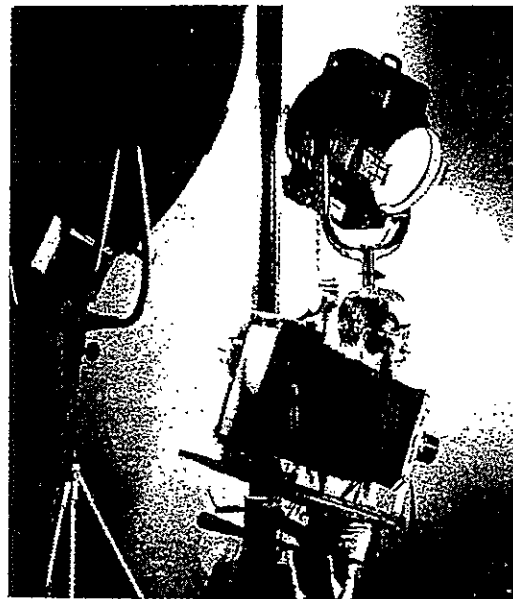
は、絵画的表現の芸術写真家は商業写真家(商品の宣伝、企業のPRなどを目的とする作家)を見下す傾向がありました。商業写真はリアルで鮮やかで鋭い焦点が求められ、個性豊かなものでした。時代が流れると芸術写真家も、よりリアリティーで個性のある写真を撮るようになり、創造性を追い求め、双方が時代の流れに沿うことになりました。

商業写真は物そのものより人に希望と夢を売るアートだと言われ、シゲタは芸術写真と商業写真を分類するのは愚かしいと言っています。シゲタは独自のテクニックで肖像写真を確立し、デリケートな手法を研究して写真の修整技術を完成しました。

大正五年

(一九一六)

修整術を研
修中の内藤
信と結婚し
ました。
新しい時
代に新しい
課題と、よ
りハイテク



撮影中のハリリー・K・シゲタ

ニックな商業写真が要求され、シゲタは写真は時代を開くものとの確信を持って、フォト・モンタージュやフォト・グラムなど新感覚の暗室技術を駆使し、芸術・商業写真両方をマスターしました。

日米開戦下
のシゲタ

昭和十六年十二月八日、日本のハワイ奇襲によつて日米は開戦しました。当然反日感情が激化し、在米日本人は強制的に収容所に入れられ、きびしい生活を強いられました。けれどシゲタは特別扱い

で一週間で拘束が解け、再び写真活動を続けることができました。シカゴ市民は、シゲタ救済の署名を集め国に訴えました。

無謀な戦いを挑んだ日本人に、敵国が安易に恩恵を与えるものでしょうか。シゲタが解放されたのは、単に写真の功績のためではなく、シゲタの人格による例外処置だったのでしょう。世界の写真家という少年の夢を果たし、アメリカへの感謝を忘れないシゲタの誠実で温かい人柄が、人々を引きつけました。

栄光のシゲタ
ライトスタジオ

生活と芸術の苦しみに耐え、絶えることのない研究心が、アメリカにシゲタの名を広げていきます。大正十三年(一九二四)、

渡米して二二年、三七歳でシカゴのモフェット・スタジオの商業写真の責任者になりました。昭和五年(一九三〇)、全米第二の大都市シカゴで、シゲタは生涯の盟友といわれたジョージ・P・ライトと共同で、シゲタ・ライトスタジオを設立しました。シゲタは欧米を舞台に二八年間、いつも新鮮で歴史に残る

名作をこのスタジオで制作しました。シゲタは自分の写真制作の知識を惜しみなく後輩に伝授し、国際的な写真活動を通じて、アメリカ以外のプロ写真家の育成にも努めています。

昭和十七年、アメリカ写真家連盟から最高の栄誉である名誉会員の称号を受け、一九四九年、アメリカ写真学会からは特別名誉会員に推挙されました。同年ロンドン国際写真コンペティションで特賞を受けました。シゲタは常に革新的な構想で、新しいアイデアを試み数多くの名作を残しています。

写真美術館を

私たち上田市民が今、ハリリー・K・シゲタを讃え誇りとするのは、写真はもとより、そのすばらしい人間性です。現地でシゲタを知る人は高齢化しているので、早くその優れた人間像を究明し、さらに顕彰すべきです。

シゲタのようにアメリカの収容所に拘束された写真家宮武東洋が、生前のシゲタから作品を預託され、宮武はこれを写真家で東京工芸大学教授細江英公に託しました。細江は、シゲタの遺作は故郷の上田にしかるべき施設があれば、そこで管理すべきと、遺品、遺作など一五〇四点を上田市に寄贈しました。そのため上田市では、シゲタの写真美術館の実現を期しています。

かつてシカゴの大スタジオに、シゲタを訪ねた元上田市長水野鼎蔵に、しみじみと「太郎山や千曲川が見たい」と言っています。その望郷の念も空しくハリリー・K・シゲタは、昭和三十八年四月、咽頭がんで七五年の生涯を閉じました。

脱俗の芸術家—彫刻家で画家

中村直人

明治三十八年—昭和五十六年
(一九〇五—一九八二)



昭和六十一年
信濃毎日新聞社
から出版された

豪華画集『中村直人の世界』に
美術評論家田中穰氏は「この
不思議な脱俗の芸術家」と題
し、冒頭に「…中村直人は彫刻

家だったのか、洋画家だったのか、あるいは日本画の画家だったのか厳密には区分ができないように、その絵も洋画か日本画かはつきりした区分はできない。洋画とか日本画とか、あるいは彫刻とかいった範疇を越え、そうした枠にはまりきれない不思議な作品を遺した大芸術家だったように私には思える…」と直人の幅広い芸術を浮き彫りにしています。確かに油絵、水彩画、ガッシュ、木彫、ブロンズ、墨絵、挿絵など多種多様の多くの優れた作品群を見るにつけ、その感を強くします。

直人の育った風土

直人の生まれた神川村黒坪(現上田市)は、上田から約3kmの郊外にあり、千曲川と神川が合流する地点の西岸に位置します。また北側には神科台地の崖が続いており、「…山川草木、森羅万象ことごとくある申し分のない南面的雅趣さえあつた…」と直人自身が

上田、名古屋、神戸などで開催しました。昭和十三年、三三歳で新文展彫刻部審査員となり、昭和十五年津澤定(沙多)と結婚しました。昭和十六年、三六歳で聖戦美術展審査員、翌年海軍省と朝日新聞社の依頼で「九軍神像」を完成し話題となりました。戦時下ではありましたが直人の評価はますます高まり、軍人や軍神肖像彫刻を軍の依頼で次々と制作し、また鉛筆や墨による生き生きとしたスケッチは新聞、雑誌に連日掲載され好評でした。彫刻家として画家として、戦時下を実に多忙な人気芸術家として制作の日々を送りました。

一方で戦争とは全く無関係な風雅な趣のある静物画、風景画を水彩や木版でたくさん描いています。これらの作品群から戦時下の芸術家の複雑な一面をみる事ができます。

一家でパリへ

終戦を迎えた昭和二十年、新日本美術会創設に参加し、読売アンデパンダン展や、日展にも出品。近所に住んで以前から親交を深めていた藤田嗣治が戦犯画家として攻撃されはじめると嗣治は日本を去ってしまいました。その「藤田からの強い勧めや若い頃から渡仏留学の果たせなかった夢の実現のためと、もう一つ藤田から言われて一年早くパリに渡っていた妻、定の都会的で進取の性格が直人の渡仏をより強く誘った」と後日直人は語っています。四七歳まで日本で築き上げた彫刻家としての地位も安定した生活も、なにより上質な木彫作品で日本一流として注目を集めていた直人が、すべてを捨てて渡仏しました。パリに渡った直人は昭和二

生まれ故郷黒坪を述懐しています。大正期中ごろ山本鼎が提唱した「農民美術」と「児童自由画教育」の二つの運動が、この地で実践され、神川を中心に全国に向かって燎原の火のように広がっていきました。直人が少年期を過ごした神川は、この二つの運動の発祥の地で、直人はリアルタイムに農民美術、児童自由画教育の誕生を直視し、その渦中で小学校時代を過ごしました。

生い立ち

中村直人は明治三十八年、父藤一、母喜多の七人兄妹の三男として生まれました。子供のころ庄屋さんと呼ばれていた、と自伝に書いているように素封家の養蚕農家でした。小学生のとき、神川小学校で児童自由画展と農民美術講習会が開かれ、長男の實は農民美術研究所の第一期生となりました。大正九年一五歳の五月山本鼎の世話で上京。院展彫刻部同人で木彫家吉田白嶺の木心舎に入門。後年父代わりとなる兄實の果たせなかった彫刻家への夢もあつたのでしょうか。兄弟子松村外次郎(後年二代会副理事長)より木彫の手ほどきを受けました。師白嶺の手伝いをしながら小杉放庵にデッサンを習い、自己の彫刻表現の模索が始まりました。大正十四年、直人二二歳のとき院展初入選、以後連続入選し大正十五年に日本美術院賞受賞。昭和十年には院展同人に推挙され、日本の彫刻界の新風として頭角を現し始めました。

戦時下の芸術家

このころ戦時色が強くなり、従軍美術家を志し中国各地を視察。従軍画展を東京、



オコの肖像

十八年パリ個展で大成功しました。その後何度か個展を開き話題となりますが、一九二〇年代のエコール・ド・パリ時代とは全く変わっていて、藤田のようにパリを席巻するということにはなりません。しかし、滞欧二二年の間に彫刻家から国際的な画家に見事な変身を遂げました。

日本へ帰国

昭和三十九年日本へ帰国。同年滞欧作品展でパリ生活一二年の成果を証明しました。その後二科会に招かれ、昭和四十六年東郷青児賞、同五十五年内閣総理大臣賞を受賞しました。無論日本の空白二二年間は、帰国後第一歩からの出直しでしたが、ガッシュ、油彩、水墨画、木版画、リトグラフ、木彫、塑像、陶彫、陶器絵付け、ガラス絵などあらゆる分野の芸術に挑戦し、完全に日本の画壇に画家として復帰しました。木彫でつかんだ骨太さを構図の中心にすえた絵画、彫刻、また西洋東洋の枠を越えたスケールの大きな作品をたくさん残して、昭和五十六年、七六歳の生涯を終えました。